brother brother

――ねえ、兎さん。

――これは魔法円といって、調べて書いてみたの。そうしたらあなたと会えたのよ。

――守るために覚えた方が良いかもって、彼が言ったのよ。

――彼とまた会いたいの。それだけでいいの、私はね。

――だけどね。

――私はそちら側に行きたいとは思わないの。

さて、任務である。

実戦参加を認められて候補生（エクスワイア）はやっとまた一つの階に足をかけることとなる。死ぬ思いを味わったりしながら確実にのぼってはいるが、勝呂竜二にはやはりまだ祓魔師（エクソシスト）になるのに経験も実力も足りていない。何しろ魔障を受けていなかったため、十五年、祓うべき悪魔が見えずにいた。と、いうより分かっていなかったという方が正しい。経に結印、知識はあったがそれだけだ、そんな人間がいきなり現場の前線を任されるはずがない。下っ端のやることは手伝いとか手伝いとか、…まあ、そんなもんだ。

「あー、やっぱ前にも来たぞ、ここ」

ガロン単位で詰められた聖水のボトルを肩に息一つ乱さず、同行の奥村燐が言う。同じものを持たされている勝呂は駅から四キロの行軍で肩が痛くなっていた。二本は流石に重い。候補生の中から燐と勝呂が指名されたのにはこれを運ぶだけの体格と体力があると踏まれたからだろう。

「……」襟足に溜まった汗を拭う。

晴れた空の、頭上高く鳥が飛んでいった、鳶だろうか。

正十字学園の森林地区、キャンプをしたところからは大分離れているが、なんというか、やはり木が多く、森らしく辺りは鬱蒼としている。細いなりにも道が拓けているのが楽といえば楽だった、小川があり、きらきらと光の粒をはね返しながら流れているのを不心得者は遊びに来た子供のように魚はどこだと目を輝かせながら見て

いたが。
　目を引くのはケヤキに混じって姿を現すクスノキの巨木だ、神木（しんぼく）と言われても頷けるほどに太く枝振りも立派だった。引率の祓魔師に連れられて来たのは、そんなところに建つ、古い日本家屋だった。別荘地の外れみたいな場所にぽつんとある奥座敷といった風情で、梁や木目の年期を重ねて深まった色合いが厳かささえ醸している。無人で手入れされてなければすぐに悪魔の温床となり、化け物屋敷になれるだろう。屋根瓦や板目の具合といい、そこそこに風格もある。平屋だが奥行きがあり、京の町屋にあるそれとどこか同じような匂いがしていた。
「二人はここで待ってなさい」
　と、引率の椿は手前の柴折り戸からではなく、生け垣を伝い、ぐるりと玄関らしきところに消えて行ってしまった。
「陶芸家のセンセイの工房って雪男が言ってた」
「ほー…」
　柴折り戸から縁に向かってびっしりと苔が生えている。身体をずらして手入れしているのだかよく分からない庭を見遣ればポンプの井戸があり、赤い花がふらふらと揺れ、緑に赤の斑を乗せているかのように咲いていた。窯なのか、その奥にずんぐりした土壁のようなものの一部が見えていた。でかい狸のせり出した腹のようだ。
　他の祓魔師がすでに着いていて、祓魔（あくまはらい）を始めている。詠唱で祓えるのだそうだが、それがまた長いそうで、時間と周囲の瘴気（しょうき）浄化と下級悪魔の駆除のための聖水を必要としていた。
「若先生、一度来たんやろ」
　荷物を置いて肩をほぐすようにしながら問う。ペットボトルの水を飲んでいた燐はこくりと頷く。
「二回も来たんだぜ。相談と、祓うので」
「ついてったんか」
「祓魔のときな」
　手伝うことがあるかもと思ってついてったんだけど、呆気なく終わっちまったんだよな、と燐は答えてから、考えるように虚空を見詰めた。
「…来たのに、祓えなかったのかよ…」あいつもし損じることあるんだなあ。
「こんだけ古いと、あちこちに憑くもんや」
　来る途中に道祖神だか地蔵だかも判断できなくなった石像と、このすぐ近くでは祠を見た。先走った燐が突っ込んだ藪にはクマザサなどに混じってサカキが群生もしていた。クスノキといい、昔から近在の人々の祈りと願いを受け止めてきた場所とわかる、陽があることもあって魍魎（コルネール）など見えないが何が潜んでいてもおかしくはない。
「じゃあ、前のとは別のが憑いたのか？」
「知るか。オマエついて行ったんやろ、弟が祓ったの何か知らんのか？」

燐は腕を組むと、偉そうに知らね、と言う。
「すっげ早かったんだよな、入りました、打ちまして、撃ちましたって、意味わかんねえ。カップ麺が出来上がるくらいの時間で終わっちまってよー、コロッケのあら熱取れてねんだもん」
「コロッケて…」
奥村燐の口ぶりを見ても手際の良い弟を褒めたいのか、手を出す隙間を与えられなかったことについて悔しがっているのかも判然としない。勝呂はオマエのが意味わからん、といつも思うがまた思った。
「飯の支度してたんだよ。ちょうどいいからタネ置いたまま行ったんだよな、で、着いたらぱんぱんやって終わり。古い皿？　鏡？にひとが半分飲み込まれてたんだけど、すぐに元に戻って…」
「魔鏡か」
「それそれ」
恐らく手に入れたかあったりした古物に憑いたのだろう、それが禍をもたらし、正十字騎士團に依頼され、相談と祓魔に赴いたのが奥村雪男で、彼は兄の言うようにさっさと仕事を終わらせた、ようだ。
「奥村の説明、全然わからへんなァ…」オマエ、ほんとあの先生の兄弟か。
「う。お、俺は雪男とは違ってそういうのは苦手なんだよ」
「でも、さっきの先生の話じゃ、何度か連絡してきてたみたいやぞ」
「だから、雪男がし損ねたんだろ」
「ちゃうわ。同じにしろ、違うもんにしろ、短期間にほいほい憑いておかしないか、っちゅーことや」
「あー。それもそうだな…」
考えるような顔で顎を撫でる。奥村燐は学業的な面からしては能く働く頭脳とはいえないが、動物的勘のようなものとある程度のものごとの理解力はあると思っている。でなければ調理などできないはずだ、コロッケのあら熱などというキーワード、勝呂は初めて聞いた。
「ほんまにアホやなあ、オマエ…」おめでたいほどに。
「雪男だって大したことないって言ってたんだぞ、そもそもこういう古いところは…」
むっとしたように返してくる、と、燐の携帯電話が着信の振動を伝えてきたらしい、こういう古いところは、と繰り返したが言葉を続けられず、タイミングが悪いという顔をし、相手はポケットを探った。
「…雪男？」
勝呂は腕を組み、改めて建物を見る。視線を感じ、転じると母屋と覚しい丸窓にちらりと人影が見えたような気がした。女性だ。あ、と思うとすっと消えてしまう、先生も戻らない。辺りには異臭こそしないが、水の匂いは満ちていた。
「何だよ、取ったのに」